

よこみち ①

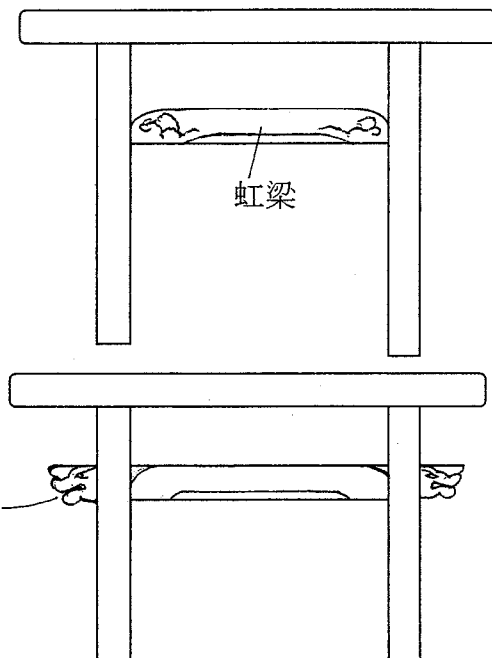
「よこみち」のページは、本文の内容とは直接関係がありません。雑学として気軽にお読みください。

社寺建築細部の見どころ

寺院建築の細部には、見どころがたくさんあります。これら細部は、神社や屋台の建築にも共通して見られるものが多いです。代表的なものを紹介します。

こうりょう 虹 梁

こうりょう 虹 梁 は一番下の 梁 のことで、虹のよう
にアーチ型になっているので 虹 梁 と言われ
ている。



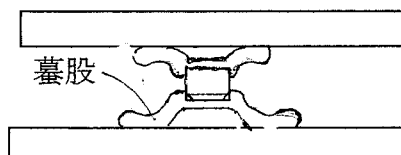
きばな 木 鼻

きばな こうりょう
木 鼻 は虹 梁 の両端が柱を突き出したも
ので、象や獅子などの頭部の彫刻が施される。

木鼻

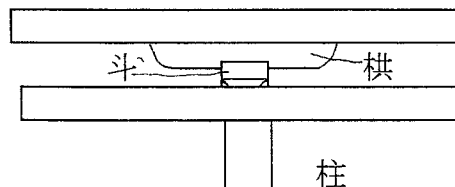
かえるまた 墓 股

かえるまた こうりょう
墓 股 は虹 梁 の中央で、その上の 梁 を支える
もの。カエルが足を突っ張ったような形をしている
ことからこのように呼ばれる。



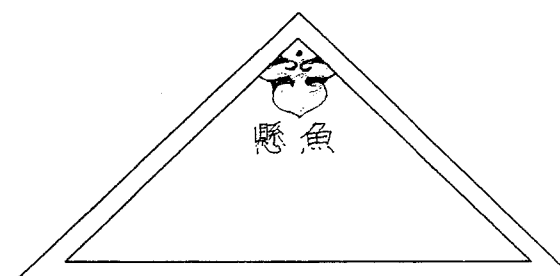
ときょう 斗 拱

と きょう
「斗」という 斗 型の部材と「拱」という船型の部材を組み合わせたもの。
屋根を支える重要な構造材。軒下に美しい
幾何学的な模様を作り出す。



げぎよ 懸 魚

屋根の妻側（三角形の部分）で棟木を覆う板。
かぶらげぎよ かりまたげぎよ やじり
蕪 懸魚，雁股 懸魚（鰭の形）などがある。



よこみち ②

答は 54ページ

四つの置き物があります。イ・ウ・エの置き物には共通点があります。共通点を三つさがしましょう。

ア



イ



ウ



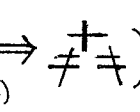
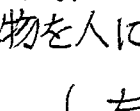
エ



よこみち ③ 奉と献

神社で 奉献 奉納、献納など「奉」の字や「献」の字をよく見かけます。
これらの文字の なりたちを調べてみましょう。

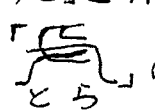
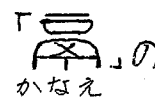
＝「奉」の字のなりたち＝

物をささげ持つ左右の手（^(物)  $\Rightarrow$ ）と受け取る
人の手（）を合わせて、「物を人に差し上げる」「たてま
つる」意味をあらわします。（右図 参照）



奉

＝「献」の字の なりたち＝

献の元字は「獻」です。「獻」部は「虍」と「鬲」からできて
います。「虍」は「とら」です。「」の形からできました。「鬲」は、な
べに三脚のついた彫理器です。「かなえ」といいます。「」の形からで
きた文字です。

鬲

- (1) 虍は顔が大きいことから、大きいとか、たくさんという意味です。
- (2) 鬲は、ごちそうを調理するという意味です。
- (3) 犬は、いぬという意味です。

(1)～(3)をまとめると、「獻」の文字の意味になります。「神にたくさんのごちそ
うとして、犬を差し上げること」を意味しましたが、後に一般に「ささげる」
意味に使うようになりました。



・・ は、甲骨文です。甲骨文(字)は、カメの甲や獣の骨な
どに刻まれた中国殷時代の象形文字です。



よこみち ②の答

- ・ 男性の神
- ・ 福の神
- ・ 福耳

よこみち ④

「温故知人」と「温故知新」

地震や台風などによる災害は、科学が発達した現代でもなかなか防ぐことはできません。まして予知さへ不可能だった時代では、突然やってくる天変地異になすすべもなく、おびえているだけでした。

家族や村共同体さえも滅ぼしてしまう流行病も、医学的知識が普及していない時代には、人々を不安と恐怖に陥れました。こうした、どうすることもできない災いは、人智を超えた何かの力によるものだと思うようになるのも当然のことだと思います。

江戸時代の平均寿命は、40歳代であったと推定されています。無病息災、無病平癒、無病長寿をだれもが願いました。寿命はその人に授かったもので、それをつかさどっている何ものかの力がはたらいているものと思っていました。

江戸時代には、村落が発達し軒を連ねるようになってきました。当時の家は茅葺屋根が多く、紙と木でできていました。火災が発生すると大火事になりました。火をつかさどるなにかの力がはたらいて、災いが起こるものと思っていました。

各家々で、村落共同で安全・安心に暮らしていけるように祈りました。



温故知人(故きを^{よる}温^{たづ}ねて (当時の)人を知る)

歴史・史跡は、その時代の人々の生活の足跡です。足跡を探っていくと、当時の人たちが何を願い、どのようなことをしてきたのか追想できるのです。そして、この時点から郷土を眺めた時、今の郷土が新たに見えてくるのでしょう。故郷は 遠きにありて思うものなり……。

「温故知人」即「温故知新」(故きを^{よる}温^{たづ}ねて 新しきを知る)でもあるでしょう。

八十二翁明善書

自 彊 不 息

天竜中学校の校長室西側壁面に「自彊不息 八十二翁明善書」と書かれた金原明善翁の遺墨が掲げてあります。^{じきょう やま}「自彊 息ず」と読みます。「自彊」は、「自分の心を励まし努力すること」です。明善翁が成し遂げた疎水事業の業績のなかに「自彊不息」が貫かれています。

明治5年（1872） 41歳 治水・水利の大構想

県令（今の県知事）林厚徳あてに「天龍川分水計画」を提出。鹿島地点から下流7里を川幅を狭く改堤して灌漑用水とし、天竜川両岸地域を開墾する。それと並行して、鹿島地点から西方へ川を造って分流し、三方原を通る運河を掘って浜名湖へ流す。

- ・ 天龍川治水と三方原開発
- ・ 天龍川両岸地域の灌漑用水整備と天龍川水運の発展
- ・ 掛塚港に代わる舞坂港の建設

などを含めた治水と水利の一体的な計画であり、当時としては比類のない大構想であった。

この計画は規模があまりにも大きいため、財政的上からも技術上からも不可能であるとして不採用になった。

明治2年（1869）

フランス人レセップス発起によるスエズ運河開通のニュースが刺激を与えたであろう。

明治16(1883) 6月15日 猪苗代湖疎水工事見学

内務省永峰書記官一行の猪苗代湖疎水工事視察に明善も参加した。

明治17(1884) 8月 「運河開鑿^{きく}計画」を立てる

天龍川西岸飯田地点から東海道南側に沿い運河を掘り、浜松市西南端の堀留地点で堀留運河に連結し、舞坂で浜名湖に流入させる。

舞坂の河口を浚渫し港湾を築き汽船が入れるようにする。これまでは掛塚港から搬出していた木材を舞坂港から東西各地に搬出しようとした。

この計画案には多くの時間と費用をかけたが費用はすべて明善が支出した。土木技師古市公威に検討してもらったところ、浜名湖が遠浅であるため実現が困難という意見が出されたので断念した。

よこみち ⑥

おんべとは いったい何か？

竜光町の氏神様の祭典では、子どもたちが家々を廻り「おんべ」という催事をしている。「おんべって何なのか 子どもたちに話してあげたいね」という町民の声が竜光町の民生委員(地域福祉部専門委員)に寄せられた。

おんべは、御幣と書く。おんべい、ごへいとも読む。^{ごへい はく}御幣帛を略して ^{ごへい}御幣とか ^{おんべい}御幣とか ^{おんべ}御幣言う。^{へい}幣は神前に供える布や紙のことである。^{はく}帛は織物を意味する。古くは、木綿や麻などの布が^{へい はく}幣帛として珍重され、それを竹や木の串に挟んで奉納した。これが次第に形式化され、後世になると^{しで}垂という細長い紙に切り込みを入れて折ったものを挟んで、神前に捧げるようになった。このように^{おんべ}御幣は元来、神への捧げ物を意味した。しかし、時代とともに^{よりしろ}依代(※)やお祓い、神前の装飾具などさまざまな意味をもつようになった。

明治 23 年 8 月

新たな調査と計画を練る

明善は内務省土木技師飯塚義光に実地調査を依頼した。飯塚義光は明治 17 年から治河協力社の小林八郎たちとともに測量に従事した人である

明善はこの実地調査後、5 年間かけて水流計画を練った。

明治 28 年(1895) 64 歳 「天龍川分水準備事務所」を設置

疎水計画の製図が完成したので、浜松町に「天龍川分水準備事務所」を設置し、分水路開削工事予算を検討した。

土地測量と設計を東京の太田工業事務所に依頼した。

事務所長 工学士 太田六郎

設計担当 工学士 高田雪太郎

明治 32 年(1899) 「天龍川分水路開鑿^{さく}工事予算及び説明書」完成

総 予 算 215 万円

内溝渠費 84 万円

内隧道費 27 万円

内水道橋費 21 万円

内土木費 44 万円

その他 39 万円

工事完成後に給水される区域の反別

田 4567 町歩

畑 5609 町歩

山林原野荒地 3029 町歩

三方原凡そ 3000 町歩

合計 16205 町歩

取水口を西川渡船の下流の屈折した辺りに設ける。そこから天龍川西岸沿いに、谷には橋を架け、山には隧道を掘り、平地には堤防を築いて南下し、浜松町東部を通して竜禅寺附近で馬込川に合流する。水路幹線延長 9 里（36 km）である。

明治 36 年(1903) 5 月 静岡県知事 山田春三に「天龍疎水計画書」を提出

申請趣旨

「社会公益に尽くすのは国民の本分である。天龍川の疎水は本州の公益を生む。1 千 2 百町歩、380 万本の山林（金原林）を寄付いたすから、これを基礎にして「天龍疎水協会」をすみかに開設し関係各位の意見と協力によって、知事の諮問のもとに開削を進めてほしい。」

県庁からは、事務輻輳 県知事の交代などのために、半年たっても返事が戻ってこなかった。明善は上京中の山田春三に面会し、申請取り下げを願い出た。申請書は戻された。

明治 37 年(1904) 4 月 7 日 「金原疎水財団法人」設立申請

静岡県知事亀井栄三郎あてに申請書を提出した。

財団補助 36 万円
地元負担金 77 万円
計 149 万円

地元負担金については、反対の声が圧倒的に多く承認が得られず未決定に終わった。

明治 43 年 「浜松市外 14 カ町村耕地整理組合」が発足する

「浜松市外 14 カ町村耕地整理組合」が発足した。金原林は山林の管理を計画通りに実行し、間伐材の切り出しも計画通り実行してきた。しかしまだ収入が管理をカバーするまでには至っていない。

大正 5 年(1916) 金原財団の負債は 8 万円余に上る

「浜松市外 14 カ町村耕地整理組合」は、設立後も内紛が絶えず、財団から紛^{じょう}擾^{じょう}解決のため約 2 万円の補助金を提出しなければならなくなった。

大正 5 年(1916) 浜松市外 14 カ町村耕地整理組合」解散

設立当初から問題があった「浜松市外 14 カ町村耕地整理組合」は、依然として内紛が続き実績不振のために、内務省の勧告により解散した。

大正 6 年 1 月 金原財団は、全額負債を整理し 10 数万円の基本金を残す

金原林の中で瀬尻御料林に隣接している新開、北山、樽口の三山を宮内庁に買い上げてもらい 26 万 8 千円が下付された。金原財団は、全額負債を整理し 10 数万円の基本金を残すことができた。

大正 6 年 2 月 17 日 ^か神妻山の事務所を財団林の現場管理機関とする

瀬尻出張所は山林を宮内庁に売却し不要になったので、神妻山の事務所が財団林管理の現場機関となる

大正 6 年 4 月 8 日 合名会社金原銀行に代わり株式会社金原銀行を設立

大正 6 年 2 月 17 日 明德、知善所有の福沢山の一部 240 町歩を 3 万 3 千円にて買い取る

大正 10 年 1 月 平野又十郎が理事に就任

大正 11 年 1 月 金原疎水財団は金原銀行の株式を 1 千株買い入れた。
1 株につき 75 円の払い込みで 7 万 5 千円の出資であった。

大正 12 年 1 月 14 日 明善逝去 享年 92

明善亡き後も、金原疎水財団を設立した金原明善の遺志に沿い、平野又十郎理事たちは金原疎水財団の運営に当たった。

大正 12 年 1 月における 金原疎水財団の資産

美林	約 3 5 万円
預金	1 3 万円
株式	7 万 5 千円

昭和 5 年(1930) 「三川用排水改良期成同盟会」設立

県営の農業水利改良事業に対する国家補助交付が決定し、静岡県各地で水利改良工事が行われ成果が上がった。天竜川西岸でも、浜名郡農業会の提唱のより「三川用排水改良期成同盟会」を設立した。【 *三川…馬込川・芳川・安間川】

昭和 7 年(1932)8 月 「三川用排水改良期成同盟会」が改良工事計画書を作成するが工事に至らず

三川用排水改良期成同盟会は、「三川改良についての計画書」を作成したが、改良工事の一切を県営公事に任せようという態度であり、着手に至らなかった。

昭和 11 年 11 月 三川用排水改良期成同盟会が工事促進の陳情書を提出

このころ日本は次第に戦時体制下に入り、全国に食料の自給自足の促進が叫ばれ、静岡県でも「静岡県浜名用排水幹線改良事業計画書」に基づく工事が行われる情勢になった。このため三川用排水改良期成同盟会は、昭和 11 年 11 月、工事促進の陳情書を提出した。

昭和 12 年 工事着工が決定し地元負担金が決められた

一、 用排水工事費	216 万円
国庫補助	108 万円
県 費	54 万円
地元負担金	54 万円
一、 馬込川改修工事費	60 万円
国庫補助	42 万円
県 費	9 万円
地元負担金	9 万円

この地元負担金の拠出に反対する意見が高まってきた。その声が次第に拡大し、工事施行反対の動きとなり、参加区域は浜松市外八カ町村まで減ってしまった。

政府と県からは、できるだけ広範囲の実施を要望してきたので、改良期成同盟会は最後の手段として、金原疎水財団に資金の援助を申し込んできた。

金原疎水財団は、改良期成同盟会の資金援助の申し出を引き受けることにした。地元負担金の全額を財団が負担することによって、天龍川西岸全域が用排水工事に参加することができた。

金原疎水財団は三方原分流工事を、昭和 10 年に着工の予定であったが、三方原飛行聯隊・飛行場の設置が国策で進められていたので、金原疎水財団の三方原疎水工事には着手できなくなっていた。

この用排水工事は、政府が昭和 16 年から 10 カ年計画で開始した「全国農地造精成・既耕地改良事業」に沿った農地開発営団事業となった。

昭和 13 年 12 月 28 日 金原疎水財団を**金原治山治水財団**に改称し定款を変更した

昭和 17 年 6 月 7 日 二俣町西鹿島の天竜川岸で**起工式を開催**
農地開発営団長 村上龍太郎式辞

天龍川沿岸の農業利水の改良事業は、全国の農地改良事業の一部であり、天龍川両岸にわたる浜松市および浜名、磐田両群の大部分、ならびに引佐、周智郡の一部を含む、総面積 8 千 9 百 35 町歩にわたる田畑に対して、用水を潤沢に供給するために行うものである。

そのために事業費として、2 百 80 万円を投入し、天龍川を水源とし、その取入口の設定、導水幹線の改良を行うものである。

完成後に挙げられる増産額は、米が 1 万 3 千 5 石、麦が 1 万 3 千 7 百 30 石に達する見込みである。

さらに浜名平野の排水を良好にして水害を除き、浜松市に工業用水の供給を実現することができる。

なお、ここで特に申し上げたいことは、本事業に必要な費用のうち、地元負担金の全額を、郷土の偉人である金原明善の遺業である、金原治山治水財団の寄付によっていることである。

金原明善の事蹟については皆様のご承知の通りでありまして、金原面善は洪水を防ぐには、山に木を植えて山を治むる必要があると考えた。そこで老齢の身をもって自ら深山に入り、十数年にわたって苦心して経営した植林が成功し、そのため天龍川の治水の基礎が固まり、またそれは田園への水源確保としても非常なる効果を収めているのである。

その上さらに今回も金原明善の御遺志を体して、用水改良事業に協力してくだされたのである。実に偉大の遺徳の及ぶところは廣大無辺で、計り知れないものがある。

昭和 21 年 6 月 **西鹿島取入口からの通水が完成した**

明善の生涯の念願であった天龍川の治水・分流疎水事業は、明善の没後 23 年目に見事実現した

よこみち ⑥

おんべとは いったい何か？

竜光町の氏神様の祭典では、子どもたちが家々を廻り「おんべ」という催事をしている。「おんべって何なのか 子どもたちに話してあげたいね」という町民の声が竜光町の民生委員(地域福祉部専門委員)に寄せられた。

おんべは、御幣と書く。おんべい、ごへいとも読む。^{ごへいはく}御幣帛を略して ^{ごへい}御幣とか ^{おんべい}御幣とか ^{おんべ}御幣言う。^{へい}幣は神前に供える布や紙のことである。^{はく}帛は織物を意味する。古くは、木綿や麻などの布が ^{へいはく}幣帛として珍重され、それを竹や木の串に挟んで奉納した。これが次第に形式化され、後世になると ^{しで}垂という細長い紙に切り込みを入れて折ったものを挟んで、神前に捧げるようになった。このように ^{おんべ}御幣は元来、神への捧げ物を意味した。しかし、時代とともに ^{よりしろ}依代(※) やお祓い、神前の装飾具などさまざまな意味をもつようになった。